The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ホラティウス『詩論』338: proxima veris「できるだけ真実に近いもの」について
Author(s)	西井, 奨
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2016, 50, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ホラティウス『詩論』338: proxima veris「できるだけ真実に近いもの」について[1)]

西 井　奨

キーワード：ホラティウス／アリストテレス／詩学／真実らしさ／美学

1. 序論

美学において vraisemblance「真実らしさ」という概念について解説される時、アリストテレス『詩学』中の重要概念である εἰκός「ありそうなこと」（『詩学』9. 1451a 36-38）に言及されるのが一般的である。その一方で、ホラティウス『詩論』338 においても、proxima veris「できるだけ真実に近いもの」という表現がある。美学史上でのアリストテレス『詩学』とホラティウス『詩論』の位置付けを考慮するならば、vraisemblance という概念が形成されていくにあたり『詩論』も一定の役割を果たしたと思われる。実際、この『詩論』中の proxima veris については、諸注釈によると、verisimilia や verisimilitude、すなわち一般的に vraisemblance として理解されている概念として捉えれられているようである。しかし、ホラティウス『詩論』での proxima veris は、その作中の文脈を踏まえるならば、vraisemblance という概念よりもずっと限定的な内容が意図されたものなのではないだろうか。そこで本稿では「真実らしさ」の概念のアリストテレス以来の言及のされかたを簡潔に検討した上で、ホラティウス『詩論』中の当該箇所について、『詩論』の他の箇所と照らし合わせることでこれが限定的な文脈の下にあることを提示する。このことにより、ホラティウス『詩論』中の proxima veris「で

きるだけ真実に近いもの」の解釈を一層明瞭なものとし、美学における「真実らしさ」の概念の取り扱いについて一定の寄与となることを目指す。

2. アリストテレス『詩学』のεἰκός に帰せられるverisimilitude

まずはじめに、現在一般的に理解されている「真実らしさ」の概念についての解説を振り返る。

> 真実らしさ verisimilitude はアリストテレスに遡る古典的な概念で（『詩学』1451a 38. 出来事の起こり方が蓋然的であることをいう）、事実の意味での「真」と対比される。「事実は小説より奇なり」といわれるように、事実を描いただけで、常に人がそれを真に受けるわけではない。詩はむしろ積極的に虚構を追求し、真実らしく見えるようにすることが大切である、というのがその考え方の大筋である。この思想は、近世の古典主義理論[2)] のなかで、その中核の位置を占めた。
> （佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会, 1995, 20.（下線・注は西井））

ここで下線を付した、「蓋然的であること」がアリストテレス『詩学』中の εἰκός である。近年の他の邦文の概説書でも、このような理解が一般的であるといえる。[3)]

このような「蓋然的であること」と「真実らしさ」の概念の結びつきに端を発すると思われるのが、1548 年にロボルテッロが出したアリストテレス『詩学』の注釈（F. Robortello, *In librum Aristotelis de arte poetica, explicationes*. Florence 1548）である。下記にアリストテレス『詩学』の当該箇所（9. 1451a 36-38）および岩波文庫版の松本・岡訳[4)]、そしてロボルテッロによるラテン語訳を並べて示す。

φανερὸν δὲ ἐκ τῶν εἰρημένων καὶ ὅτι οὐ τὸ τὰ γενόμενα λέγειν, τοῦτο

ποιητοῦ ἔργον ἐστίν, ἀλλ᾽ οἷα ἂν γένοιτο καὶ τὰ δυνατὰ κατὰ τὸ εἰκὸς ἢ τὸ ἀναγκαῖον.

以上に述べたことから、さらに次のことが明らかである詩人（作者）の仕事は、すでに起ったことを語ることではなく、起こりうることを、すなわち、ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で起こる可能性のあることを、語ることである。

Sane constat ex supradictis, non poetae esse, facta ipsa propria narrare: sed quemadmodum vel geri quiuerint, vel verisimile, vel omnino necessarium fuerit.

（アリストテレス『詩学』9. 1451a 36-38、下線は西井）

ここで下線を付したように、ロボルテッロはεἰκός のラテン語訳に verisimile（verisimilia の単数形）をあてている。またさらに、アリストテレス『詩学』24. 1460a 26-28 においても εἰκός は言及される。

προαιρεῖσθαί τε δεῖ ἀδύνατα εἰκότα μᾶλλον ἢ δυνατὰ ἀπίθανα: τούς τε λόγους μὴ συνίστασθαι ἐκ μερῶν ἀλόγων,

また、信じられないけれども可能であることがらよりも、ありそうでありながら実際には不可能であることがらのほうを選ぶべきである。

Itemque fieri quae neutiquam possunt, modo verisimilia sint, potius quidem eligenda esse, quam quae minime verisimilia: licet fieri possint.

（アリストテレス『詩学』24. 1460a 26-28、松本・岡訳、[5] 下線は西井）

ここでも下線を付したようにロボルテッロはverisimiliaを訳語にあてている。

またロボルテッロから時代が下り、かの『美学』を著したバウムガルテンもその作中で εἰκός と verisimile / verisimilia を結びつけている（A. G. Baumgarten, *Aesthetica*. Frankfurt a. d. Oder. 1750/58）。まずバウムガルテンは次の箇所で「真実らしさ」について言及する。

Jam apertissimo putauerim calculo constare plurima inter venuste cogitandum appercipienda, non esse complete certa, neque luce completa veritatem eorum cnspici, §481, 482. Nec in vllo tamen falsitatis aliquido sensitiuae deprehendi potest sine turpitudine, S. XXVIII.Talia autem, de quibus non complete quidem certi sumus, neque tamen falsitatem aliquam in iisdem appercipimus, sunt VERISIMILIA. Est ergo veritas aesthetica S. XXVII. a potiori dicta VERISIMILITUDO, ille veritatis gradus, qui, etiamsi non euectus sit ad completam certitudinem, tamen nihil contineat falsitatis obseruabilis.

麗しく思惟する間に知覚されるべき多くのものは、完全に確実というわけではないし、それらの真理が完全な光りによって目立つわけでもないことは、極めて明瞭な考察によって明らかになっていると思う（§481, 482）。しかし、いかなるものにおいても、感性的偽が醜なしに知覚されることはありえない（第28節）。ところで、それについて我々は完全に確実であるわけではないが、その中にいかなる偽をも知覚しないようなものが真実らしいものである。従って美的真理（第27節）は、その本質において真実らしさ、即ち、たとえ完全な確実性には達していないにせよ、観察されうる偽を些かも含まないような真理の段階である。

（バウムガルテン『美学』§483、松尾大訳、[6] 下線は西井）

そのうえで次の箇所で、εἰκός と verisimile を結びつけて述べている。

Cuius habent spectatores *auditoresue intra animum*, quum vident audiuntue, quasdam anticipationes, quod plerumque fit, quod fieri solet, quod in opinione positum est, quod habet ad haec in se *quandam similitudinem, siue id falsum* (logice, et latissime,) *siue uerum sit*.(logice et strictissime) *quod non sit facile a nostris sensibus abhorrens*: hoc illud εικος et verisimile, quod, Aristotele et Cicerone assentiente, sectetur aestheticus, §483.

In rebus enim eiusmodi non solet analogon rationis quicquam falsitatis obseruare, licet non omnino de veritate eorundem conuictum sit. Hinc Ciceroni describitur *inuentio excogitatio rerum verarum aut verisimilium, quae caussam probabilem* (aesthetice) *reddant*.

観客や「聴衆は」、見たり聞いたりするとき、「心のうちにある予期を持つ」。「それは大抵の場合に生ずること、普段生ずること、通念となっていること、これらとの一定の類似性を含んでいること――これは」（論理的に、そして最広義で）「真であろうと」（論理的に、そして最狭義で）「偽であろうとかまわない――」、「我々の感覚から容易に離れないもの、こういったものについての予期である」。これらのことが＜エイコス＞、即ち真実らしいものである。美的主体がこれを追求せねばならぬことにアリストテレースもキケローも同意している（§483）。なぜなら、このような事柄において、理性類似者は、たとえそれらの真理性について確信していないにしても、何らの偽をも観察しないのが普通であるからである。この故に「発見とは事例を」（美的に）「蓋然的なものにするための、真なる、もしくは真実らしい事柄の案出である」とキケローに記述されている。

（バウムガルテン『美学』§483、松尾大訳、[7] 下線は西井）

そしてその上で、[8] 次の箇所においてホラティウス『詩論』338 の proxima veris「できるだけ真実に近いもの」についても本文の行を引用して言及する。

Quae non totidem ideis sensimus, quot denuo cogitamus, quaeque tamen sensitue cognoscenda sunt, sunt, fingenda, M. §.589. Hinc FICTIONES LATIUS DICTAE, M. §.590. perceptiones combinando praescindendoque phantasmata formatae, longe maximam plucre cogitandorum partem constituunt.

Ficta uoluptatis caussa sint proxima ueris, §504

§506 Non proxima solum veris, sed et ipsa strictissime plurima, non nisi fictionibus latius dictis pulcre cogitari sensitiueque possunt.

思惟するときほど多数の個別概念でもって我々がそれを感覚したわけではないが、しかもそれを感性的に認識せねばならぬ場合、それを創作せねばならない（M, §589）。それ故**広義の虚構**（M, §590）、即ち心象を結合、分離することによって形成された諸概念は、美しく思惟されるべきものの最大の部分を構成する。

「快のために創作されたものは、真に迫ったものであるように」（§504）。真に迫ったものであるだけでなく、それ自体最も厳密な意味で真であるところの多くのものは、広義の虚構によってのみ美しく感性的に思惟することができる。

（バウムガルテン『美学』§505－506、松尾大訳、[9] 下線は西井）

以上のようにバウムガルテンは、「美的真実らしさ」（verisimilitudo aesthetica）を述べる節（§478-§538）において、§505ではホラティウス『詩論』338: ficta voluptatis causa sint proxima veris を引用し、これを受けて§506でも続いてproxima verisという表現を用いている。このように美学における「真実らしさ」の概念史に、アリストテレス『詩学』における εἰκός だけでなくホラティウス『詩論』338のproxima verisも関与しているといえよう。

しかし、このバウムガルテンの一節は、本稿次章で検討するように、ホラティウス『詩論』本来の「劇の舞台上で見せること」という文脈を削ってしまっている。同様に、一般的なホラティウス『詩論』338の解釈についても、このような第338行だけが独り歩きしたような解釈がなされてきたせいか、本来の文脈への考慮が疎かになってしまっているものがあり、そのことがホラティウス『詩論』の理解を不十分なものに留めてしまっていると思われるのである。

3. ホラティウス『詩論』338: proxima verisの解釈

ホラティウス『詩論』のうち、338行目のproxima verisを含む333-346の一節は、「詩人が狙うのは、有用性か、よろこびか、あるいはその両方か」という内容を述べるものとしてひとまとまりをなしているとみなされている。[10] 次に引用するのは、特に重要な333-334, 338-340である。

aut prodesse volunt aut **delectare** poetae 333
aut simul et iucunda et idonea dicere vitae. 334
(…)
ficta **voluptatis** causa sint **proxima veris**, 338
ne quodcumque velit poscat sibi **fabula** **credi**,
neu pransae Lamiae vivum puerum extrahat alvo. 340

詩人が狙うのは、役に立つか、**よろこばせる**か、あるいは人生のたのしみにもなれば益になるものを語るか、のいずれかである。(…) **よろこばせる**ためにつくられたものは、できるだけ真実に近いものでなければならない。**劇は**、本当だと**信じてもらい**たいものがあるからといって、それを信じるよう要求してはならない。——たとえば、昼食をとったラミアの胃袋から生きた子供を引っ張り出すようなことをしてはならない。
(ホラティウス『詩論』333-334, 338-340、松本・岡訳、[11] 下線は西井)

ここでのproxima verisについて、既に紀元後2世紀の偽アクローによるホラティウス『詩論』へのスコリア(古注)で既に、"Quae fingit poeta voluptatis causa, verisimilia debent esse."「詩人が喜びのために作るものは、真実に似たものでなければならない。」[12] というように、既にverisimiliaという語が用いられている。

また、先述のアリストテレス『詩学』の注解を発表したロボルテッロは、

同時にホラティウス『詩論』のラテン語散文パラフレーズも発表している。ここでも、下記の引用のように、proxima veris というホラティウス『詩論』の表現を similia vero「真実に似たもの」という散文パラフレーズをしている。

> Delectant autem poetae, quod secundo loco fuerat propositum, quotiescunq. aliquid fabulosum confingunt; sed & haec similia vero esse oportet. Nam si a veritate recedunt; fidem sibi, & poetae dignitatem derogant; Vtpote siquis in scena fingat ex Lamiae alvo viuum extrahi puerum, quem paulo ante sua ingluuie integrum vorasset.
> （F. Robortello, *Paraphrasis in librum Horatii, qui vulgo de arte poetica ad Pisones inscribitur,* 18.（下線は西井））

先述のように、ロボルテッロはアリストテレス『詩学』中の εἰκός に verisimile や verisimilia という訳語をあてていた。このように εἰκός も proxima veris も共に “verisimilia” と捉えられてきたのである。実際、Brink、Rudd、松本・岡のような近年の代表的なホラティウス『詩論』の諸注釈も、このホラティウス『詩論』338 の proxima veris について弁論術における εἰκός である[13)] としているのである。[14)]

しかしここで注意したいのは、338 に続く 339-340 である。これらの近年の諸注釈は 338 と 339-340 を関連させていない。これは松本・岡訳にも反映されているように、338 と 339 を asyndeton で結びついているとして 339 行頭の ne を否定命令の接続法（ここでは velit）に付されるものと解釈されているからである。しかしこの箇所は、338 を主文とし 339-340 を 338 につながる否定の目的文の ne と解釈することも可能である。つまり松本・岡訳をそのように解釈して改変するならば、338-340 は「劇が、本当だと信じてもらいたいものがあるからといって、それを信じるよう要求することのないように、また、昼食をとったラミアの胃袋から生きた子供を引っ張り出すようなことをしないように、よろこばせるためにつくられたものは、できるだけ真

実に近いものでなければならない」、と改訳できるだろう。[15] 本稿では明確にこの解釈を採り、338と339-340を結びつけて考えたい。

さて、この339-340の「劇」や「ラミアの胃袋から生きた子供を引っ張り出す」という内容から想起されるのが、以下のホラティウス『詩論』179-188である。

aut agitur res in scaenis aut acta refertur.
segnius inritant animos demissa per aurem 180
quam quae sunt oculis subiecta fidelibus et quae
ipse sibi tradit spectator: non tamen intus
digna geri promes in scaenam multaque tolles
ex oculis, quae mox narret facundia praesens:
ne pueros coram populo Medea trucidet 185
aut humana palam coquat exta nefarius Atreus
aut in avem Procne vertatur, Cadmus in anguem.
quodcumque ostendis mihi sic, incredulus odi.

舞台の上では行為が演じられるか、それとも、行われたことが報告されるかの、いずれかである。耳を通して入ってくるものは、頼りとなる目の前に差し出され観客が自分で見て納得するものにくらべて、それほど強く心に働きかけはしない。けれども舞台裏で行うのに向いていることを舞台に持ち出すべきではない。多くのことは観客の目にふれないようにし、やがて能弁の者を登場させて報告させるように。メーデイアが衆人の前でわが子を殺してはいけない。また極悪人アトレウスが人前で人肉を料理し、プロクネーが鳥に、カドモスが大蛇に変身してはならない。何であれそのようなものを見せられるなら、わたしは信じることができず、胸が悪くなる。

（ホラティウス『詩論』179-188、松本・岡訳、[16] 下線は西井）

この一節では、劇における舞台上でなされることについて、「行為が演じられる（agitur res）」ことと、「行われたことが報告される（acta refertur）」ことという分類がまずなされる。そして、「舞台上で直接観客の目に触れる形でなされるべきでなく、報告という形で伝えられるべきもの」として、「メーデイアの子殺し」や「アトレウスの人肉料理」や「プロクネーの鳥への変身」や「カドモスの大蛇への変身」が挙げられる。これら4つの例はまさに、339-340の「ラミアの胃袋から生きた子供を引っ張り出す」ことと同種のものといえる。そしてこれらのことは、「舞台上で直接見せずに報告者が報告する」のならば問題ないのである。とすると同様に、「ラミアの胃袋から生きた子供を引っ張り出す」ことも「舞台上で直接見せずに報告者が報告する」のならば問題ないのであって、『詩論』338の “ficta voluptatis causa sint proxima veris”「よろこばせるためにつくられたものは、できるだけ真実に近いものでなければならない」というのは「舞台上で直接見せること」に限定された状況に関するものなのである。

この『詩論』179-188と338-340の内容の連関は、188のincredulus「信じることができず」と339のcredi「信じてもらう」が相反するものとして語根的に呼応していることと、188のodi「嫌悪する（胸が悪くなる）」と338のvoluptatis causa「喜びのために」も意味的に相反するものとして対応していることも傍証となるだろう。

また先述のロボルテッロが、下記のようにホラティウス『詩論』179-188をパラフレーズしている。

> Debebit igitur attente operam dare poeta, ut internoscat, quae agenda, quaeve non agenda sint in scena; nonnulla enim intus occultanda sunt, nec in scenam promenda; [...]
> Si enim huiusmodi spectanda praebuerit poeta in scena; quae crudelitatis plenissima sunt; praeterquam quod illa sua auctoritate animos offendent spectatorum; haec quoque non erunt similia vero;

（F. Robrtello, *op. cit.*, 11（下線は西井））

ここで『詩論』185-188の内容について下線箇所のように「similia vero でない」というパラフレーズをしていることから、179-188と、同様に proxima verisについてsimilia veroとパラフレーズしている338-340の対応性を、ロボルテッロは認識していたと思われる。ただしこのロボルテッロが認識していた両個所の対応性が、『詩論』338の注釈に際しては見落とされてきたのである。[17)]

4. 結論

ホラティウス『詩論』338の、proxima veris「できるだけ真実に近いもの」という表現を含む、「よろこばせるためにつくられたものは、できるだけ真実に近いものでなければならない」という内容は、「舞台上で見せること」に限定されたものであり、報告者による語りにまで適用されるものではなく、したがって物語創作全般に適用されるような vraisemblance というわけではない。それゆえ「真実らしさ」の概念史においてホラティウス『詩論』にも言及する際は、このことも合わせて言及するべきである。

ホラティウス『詩論』に関して、ut pictura poesis「詩は絵のごとく」（361）という表現が、『詩論』中の文脈から切り離され一人歩きする形で受容されたことはよく知られている。[18)] ある種、この ut pictura poesis と似たような受容のされかたを proxima veris「できるだけ真実に近いもの」（338）もされてきたという側面があり、一般的な vraisemblance「真実らしさ」の概念が既にあるからこそ、今日のホラティウス『詩論』読解に際しても、本来の文脈に沿った理解がなされない傾向にあったのである。

［注］

1） 本稿は、2015 年 10 月 11 日に第 66 回美学会全国大会（於早稲田大学）にて口頭発表した内容に基づくものである。なおこの発表の要旨は、雑誌『美学』66. 2（2015）, 131 に収録されている。
2） これについては、本稿注 17 で後述する。
3） 小田部（2009）, 15-21、大浦（2013）, 24-25 など。
4） 松本・岡（1997）、43.
5） 松本・岡（1997）、94.
6） 松尾（1987）、253-254.
7） 松尾（1987）、254.
8） ここでバウムガルテンは、εἰκός について述べるにあたり、アリストテレスをキケロと並列して言及している。ここでの言及は、アリストテレスは『アレクサンドロス宛弁論術』、キケロは『発想論』（*De Inventione*）・『弁論家について』（*De Oratore*）に関するものである。このことから、この εἰκός 概念は『詩学』上のものというよりは弁論術での εἰκός 概念であるといえる。松本・岡訳の注によると、[8)] アリストテレス『詩学』における εἰκός 概念は弁論術上のそれとは異なるとしているが、河谷淳はそのように異なるものと捉える必要はないという見解を提示している（河谷（2005）、106-107）。
9） 松尾（1987）、265.
10） Brink (1963-1982), ad loc., Rudd (1989), ad loc., 松本・岡（1997）、228.
11） 松本・岡（1997）、249.
12） *Acronis et Porphyrionis commentarii in Q. Horatium Flaccum.* vol. 2, 631（拙訳）。
13） 詩学と弁論術の εἰκός 概念の相違については、注 8 で言及しているところの河谷淳の見解に従い、分けて考える必要はないとの立場を本稿では採る。
14） Brink (1963-1982), ad loc., Rudd (1989), ad loc., 松本・岡（1997）、286.
15） Rudd (1989) の注釈、Davie(2011) の英訳もそのようなものとなっている。
16） 松本・岡（1997）、240-241.
17） なおこのホラティウス『詩論』338 の 179-188 との対応を、17 世紀フランスの古典主義を代表するドービニャックやボワローは認識していたようであり、ドービニャックの『演劇作法』第 2 部第 2 章やボワロー『詩法』の第 3 編 47-54 では、このような「舞台上で見せてはならないこと」と vraisemblance「真実らしさ」が関連付けて述べられている。
18）「ホラティウスは決して、この表現によって詩と絵画を密接に関連付けようとする意図はなかったのであるが、いつしか“ut pictura poesis”という絶妙な定型句は一人歩きをはじめ、やがては「視覚芸術と文学との同一視を言祝ぐ黄金律」とし

てあがめられ、元来の意味からは独立した独自の文芸伝統を確立するに至った。」（桑木野（2013）, 177）

［文献表］

Baumgarten, A. G., *Aesthetica*. Frankfurt a. d. Oder. 1750/58.

Boileau-Despréaux, N., *Épîtres; Art poétique; Lutrin*. texte établi et présenté par Charles-H. Boudhors. Paris 1939.

Brink, C. O., *Horace on Poetry*. 3 vols. Cambridge 1963-1982.

Davie, J.(tr.), *Horace Satires and Epistles*. Oxford 2011.

Havthal, F.(ed.), *Acronis et Porphyrionis commentarii in Q. Horativm Flaccvm*. 2 vols. Amsterdam 1966 (rep. Berlin 1864-1866).

Kassel, R.(ed.), *Aristotelis De Arte Poetica Liber*. Oxford 1965.

L'Abbé d'Aubignac, *La Pratique du Théâtre*. éd. par Pierre Martino, Alger, Jules Carbonel 1927.

Robortello, F., *In librum Aristotelis de arte poetica explicationes : Paraphrasis in librum Horatii, qui vulgo de arte poetica ad Pisones inscribitur (1548)*. München 1968.

Rudd, N., *Horace, Epistles, Book II and Epistle to the Pisones ('Ars Poetica')*. Cambridge 1989.

大浦康介（編）『フィクション論への誘い』世界思想社, 2013.

小田部胤久『西洋美学史』東京大学出版会, 2009.

河谷淳「『詩学』における二重様相の問題」『西洋古典学研究』53（2005）, 103-113.

桑木野幸司『叡智の建築家――記憶のロクスとしての 16-17 世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版, 2013.

佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会, 1995.

戸張智雄（訳）、オービニャック師『演劇作法』中央大学出版部, 1997.

松尾大（訳）、バウムガルテン『美学』玉川大学出版部, 1987.

松本仁助・岡道男（訳）『アリストテレース 詩学 ホラーティウス 詩論』岩波文庫, 1997.

守屋駿二（訳）、ボワロー『詩法』人文書院, 2006

（文学研究科特任講師）

SUMMARY

An Interpretation of Horatius *Ars Poetica* 338: proxima veris

Sho NISHII

When we try to understand the concept of aesthetic verisimilitude historically, it is important to know about "εἰκός" in Aristotle's *Poetics*. In addition, it is also important to know about "proxima veris" in Horace's *Ars Poetica* 338. About "proxima veris", however, we have been apt to overlook the context of the line 338 because of general understanding of the consept of verisimilitude. By reading Horace's *Ars Poetica* philologically, we can relate 338-340 and 179-188. Considering this relation, we can interpret the meaning of line 338 "fictions must be close to real as much as possible" limited to actions on the stage. In other words, "proxima veris" is not necessarily aplied to messengers' reports and the whole story under the context of Horace's *Ars Poetica.*